

THE
Olympic Golf Club



SEPTEMBER 2001 VOL. 4

海外でのゴルフ

出席者 大川 清

飯田洋三

聞き手 五嶋雅徳

商社の第一線で活躍され、現在は大阪に本拠を置くスポーツウエアメーカーの社長として、お忙しい日々を過ごしておられるデサントの飯田社長を迎えて、大川会長との三者対談となりました。何ととっても飯田社長の商社マン時代の海外でのゴルフ経験の多さは圧倒的。楽しいエピソードも数多くお持ちで、驚いたり、笑ったりの楽しいひとときとなりました。(五嶋)

セントアンドリュースのこと

五嶋 「飯田さんは、オリンピックGCの理事をされてるの
で創立の当時から係わっていらっしゃるんですね」

飯田 「はじめから会員にさせてもらってます」

五嶋 「徳島のご出身だとか。市内ですか」

飯田 「いえいえ、徳島からさらに南の方へ海岸線を行った牟岐というところですよ」

五嶋 「ああ、実は私、何回も行ったことがあります。新聞社で徳島の支局長をしまして、今から22、3年前ですが、2年ほどいました。で、同志社を出られて伊藤忠に入られて」

飯田 「ええ、そうです」

五嶋 「この前対談したキャプテンの上林さんも同志社で…」

飯田 「上林さんは先輩ですよ」

五嶋 「何か同志社というのは伊藤忠とつながりでもあるんですか(笑い)」

飯田 「いやいや、何もないですよ(笑い)」

五嶋 「上林さんからの話や、ご経歴をうかがうと、海外へのご出張が250回にのぼるそうですね」

飯田 「数えたことないですけど、それくらいは行ってると思います」

五嶋 「そりゃ、すごい」

飯田 「(昭和)33年に入社して、34年頃、ヨーロッパから繊維の輸入を始めましてね。当時は外貨の割り当て制度がありまして、決まった量しか輸入できない時代でしたけど、だんだん品目も毛織物だけからシルクの織物、プリントもいい、と広がってきまして、それをずっと27年間やってきました。そんな関係で1年に7回とか8回とか海外に行きました」

五嶋 「大川会長も元世界シニアアマチュアで世界中を回っていらっしゃる。特にオリンピックGCというのは、会長がイギリスで見かけられたお城がモデルとか」

大川 「バーミンガムの郊外にある、世界の名建築の城ですね、それで、設計者に同行してもらい外見をモデルに、大きさはちょっと変えて、中はうちの使い



やすいように作りました」

五嶋 「バーミンガムというとロンドンのどっちのほうになりますか」

飯田 「西北ですよ」

五嶋 「セントアンドリュースとは」

飯田 「セントアンドリュースは真北ですよ」

五嶋 「ゴルフを長いことしていると、セントアンドリュースへ行きたくてしょうがないんですが、飯田さんは10何回もとうかがっておりますが」

飯田 「13回ですよ」

五嶋 「いやあ。メンバーズサロンに書いていただいたセントアンドリュース・オールドコースのこと、というあの原稿を見て、もうびっくりしました。13回も。失礼ですが、一番いいスコアはいくらでした」

飯田 「いやいや。たこつぼバンカーなんか入ったら、拾って行きますからね。スコアはようわからんですけどね。しかし、日本で80で回る人は90、90で回る人は100ですね。会長はどうですか？ やっぱり70台で回りましたか？

大川 「あの時ね、調子が良かった。それと天候がね、風もなく最高によかった。1オーバー位かな」

飯田 「へーっ、そりゃ立派なもんや、さすがだ」

五嶋 「へえーっ」

大川 「キャディーも、ゴールドのいいキャディーで」

飯田 「キャディーに3種類ありましてね」

五嶋 「はい」

飯田 「担ぐだけの人と、ある程度アドバイスのできる人と、プロ並みの人と。お金が全部違うんですね。キャディフィーが」

五嶋 「ああ、そうですね」

大川 「僕もね、ゴールドキャディーがあの方向と言うところへ打ったら、間違いない。距離なんぼや、というて打っても間違いない。だから何も苦勞せずにプレーできました」

飯田 「たしかに、セントアンドリュースはティーグラウンドから全く見えないバンカーが沢山ありますからね」

五嶋 「ええ、テレビでしか観てませんけど(笑い)」

飯田 「いいショットを打ったと思っても、バンカーに入ったら沢山たたきますから」

大川 「キャディーの言う通り打っていけないと、苦勞する」

五嶋 「僕もね、イギリスに5回くらい行ってるんですけど

ど、セントアンドリュースへ行こうとすると、そのたびに仕事が入るんです。去年の11月も、明日行くという約束して38度の熱が出てやめました」

五嶋「セントアンドリュースの隣にアバディーンという町がありますね」

飯田「ああ、ありますね」

五嶋「そこにヨーロッパでは有名な美術館がありまして、去年、美術品をお借りして奈良で展覧会を開いたんです。で、そこの館長さんを招待してゴルフの話になりましたら『アバディーンやセントアンドリュースを知らないでゴルファーを名乗っちゃだめだよ』と、言われました」

飯田「アハハハ」

大川「ハハハ」

デンバーで

五嶋「だけどもあ、飯田さんはすごいですね。アメリカ、オーストラリア、もうほとんど行ってられるんですね。バリ島も、スイス、スペイン、中国、台湾、韓国、インドネシアも。で、何かデンバーでおもしろい経験をされたとか？」

飯田「はいはい。これはね、デンバーにチェリーヒルズと言うところがありまして、1922年の設立の、全米で20に入るという名門の素晴らしいコースなんです。1番ティーの横に石碑が建ってましてね、そこにこう書いてあるんです」

【1960年の全米オープンで、3日目を終わってトップのマイク・スーチャックに7打差をつけられていたアーノルド・パーマーが1番の404ヤードをワンオンして、イーグルを出して、さらにラッシュを重ねてついに4アンダーで優勝した】

五嶋「はあー」

飯田「【その時、2位に入ったのが当時20歳の学生だったジャック・ニクラスだった。それから二人の20数年に及ぶ死闘が続いた】、という石碑なんですね。なるほど、下りのだらだらと下りていくホールですから、追い風だったら当時のパーマーなら行くかも分かんらんとしたんですけど。何しろ、今と違ってパーシモンにスチールシャフトでしょ。今で言うたら450(ヤード)くらい飛んだ感じですね。そういうのを検証するのはなかなか面白いと思いますね」

五嶋「そうですね」

飯田「そのうち、セントアンドリュースにミスター大川が73で回ったという石碑が建つかも(笑い)」

大川「いやいや」

五嶋「いい話ですね」

飯田「ここですね、非常に面白いことがありました。デンバーに私どもの会社があるんですが、1992年に顧問弁護士がゴルフをしようというんです。で、チェリーヒルズに連れていってくれた。しかし、何か様子が違うんですな。入口に紳士が直立して待っていてくれまして『私はこのクラブの広報委員長である。ミスター飯田よう来た』と、歓迎してくれるわけです」

五嶋「????」

飯田「アシスタントプロをキャディーにつけてくれる、晩飯はごちそうしてくれる。でね、最後になって『1993年にここで全米シニアをやる。マスメディアを200人集めて近く説明会をやる。ついては相談だが、あなたのところのゴルフウェアは大変評判がいい。よって200枚くれんか』というわけです」

大川「ワハハハ」

五嶋「ハハハハ」

飯田「一緒に連れていったデサントアメリカの社長に200枚言うたら原価でなんぼするんや、と聞いたら100万円ですという。我々は二人で50万円ずつの高いゴルフをしたわけです。初めから出来た話だったようですが、誠に面白かった」

五嶋「うん、うん」

飯田「それでね、翌年また、たまたま行きますとね、シニアオープンやってまして、18番ホールのグリーンの後ろにお偉方がイスに座ってるわけですよ。そこヘリー・トレビノが打ち込んできましてね。ボールがイスの後ろに行っただけですわ。トレビノが来て、お偉方がイスを下げて立とうとしたらトレビノが『3人だけでけっこうです』と言って3人分空いたところを後ろからビューンと抜いていった。シニアいうのはええ技術持つとるな、と思いました。その時優勝したのがニクラスで、彼はあのコースに縁があるんですね」

バリ、スペイン、北京

五嶋「バリ島でのゴルフというのは？」

飯田「招待ゴルフです。ダンヒルがダンヒル・エイジアンマスターズという大会を3年くらいやりまして、イアン・ウーズナムなど世界のプロが集まりました。2回行きました。一回は、前理事長の堀田さんと一緒でした」

五嶋「そうですね。さらに、スペインとかドイツ、ベルギーというヨーロッパは分かるんですが、中国というのはビジネスの関係ですか？」

飯田「私も北京の郊外に小さな縫製工場を持ってまして、明の十三陵というところでして」

五嶋「ええ、知ってます」

飯田「そこから15分くらい行ったところに北京国際ゴルフ場というのがあります」

五嶋「ええ、あります」

飯田「あそこは私の遠い親戚関係の大西さんという人が





オーナーで、そんな関係で」

五嶋 「そうですか、仕事にゴルフ、まったくよろしいですね」

飯田 「そうでもないんです。忙しくてね。オリムピックGCさんになかなか行けないのはね、全国に支店が7つあるんですよ。支店の所在地で百貨店の部長さんを集めてゴルフをするわけです。札幌、仙台、福岡、広島と。そうするとクラブが2セットでは足りませんね」

大川 「ワハハハ」

五嶋 「ハンデは10いくつで」

飯田 「20です。弱い20です」

五嶋 「会長、どうですか？ 飯田さんのゴルフは」

大川 「強いですよ。一緒に回って気持ちのいい、あまりもたもたしない、楽しいゴルフをなさる。よく飛びますよ」

飯田 「早いだけが取り柄でございましてね。1 昨年12月、堀田前理事長と某ゴルフ場で2 ラウンド回りました。終わったらまだ3時半ぐらいでした。『もうハーフいきましようか』と言ったら、さすがに堀田さんが『もうええわ』といいましたけど（笑）それぐらい早いゴルフです」

五嶋 「奥さんはゴルフは？」

飯田 「やらないんですよ」

私にはスポーツを振興する義務がある

五嶋 「話は飛びますが、今年ゴルフ100年でいろいろと催しもあるようですが、最近のゴルフ事情を見られて何かご意見があれば」

飯田 「そうですね。私、野球でもそうですが、若いプレーヤーがどんどん少なくなっている。予備軍が。ゴルフっていうのは、日本人の頭に何か贅沢なものとしてしみついていて、簡単に子供にさせようと思えませんね。海外だったら、たとえば、土曜、日曜の午後2時か3時にメンバーが終わったら、子供たちがクラブ持ってやっていますね。ああいうことやっているとゴルフ人口は減って来るんじゃないかと心配してるんですよ」

五嶋 「そのためには、どうでしょう？ プレーヤーが多いとかありますが」

飯田 「このごろずいぶん安くなっていますね。でも、子供には無料開放しなきゃ、いかんでしょね」

五嶋 「飯田さんのデサントはマンシングウエアカップを

開かれるなどゴルフ振興に大変貢献してらっしゃる」

飯田 「春にメンズのマンシングウエアオープン（KSBカップ）、秋にレディースの大会（東海クラシック）とやっていますが、実は景気が低迷している中、1998年に、28年間やってきたアディダスの商売が相手の都合で取りやめになりましたね。そうすると、ゴルフのプロモーションなんかやめましようという人が、社員の中にはおりましたね。我々は、単にスポンサーをやっているわけではない。会社としてスポーツを振興する義務があるんだ。赤字でもやる、と私がこう言って頑張っているわけですわ」

五嶋 「それは、それは。われわれも毎年春秋でアマチュアのレディース大会で御世話になっています。ありがとうございます」

ジュニアの養成を

五嶋 「会長はいかがですか？ 選手としてもすごかったし、経営者としてやってらっしゃるから何か、ご意見があれば」

大川 「私が考えますのは、層が薄くなっているのは、すなわち景気が悪いのといろんな遊びが増えてきたのです。やはり、掘り起こすことを考えなくては。ジュニアの養成ですね。ゆくゆくは皆さんがゴルフのよさを分かってくると思います。ゴルフ先進国の人口を比較したらまだまだ日本のゴルフ場は足りません。」

飯田 「十分の一でしょう。二万と二千ぐらいの違いです」

大川 「はい、オリムピックGCの場合は、ご存知の通り、テニスコート作って、プール作り、温泉まで掘って家族ぐるみ、近所の友人皆、誘い合って、片方はゴルフ、片方はテニス、水泳、帰るときは一緒にと言うようなアメリカやヨーロッパのスタイルに持ってきてあるわけですね。ゴルフというのは男だけの世界ではないと分かっていた方がいい。そういう風に誘導する役目もやっていかなくては」

飯田 「ああ、いいことですね」

五嶋 「アメリカではゴルフ場で結婚式をしますね。びっくりしたのは、ボストンの美術館では株主総会もやってましてね」

飯田 「ファッションショーもありますし」

五嶋 「ええ、そういうのを活用したらいろんな人がもっと入ってくる」

飯田 「それから、日本では子供と大人の区別がつかんようなところがありますね。ジュニアゴルファーは養成せないかんけど、うんとちっちゃい子がゴルフ場をうろうろされたら困ります。ベルギーにロイヤルベルジャンGCというのがありまして、入口の門を入ったところに子供を預かってくれる施設があります。教育の問題ですね」

行きたいゴルフ場

五嶋 「オリンピックGCのことをお聞きしますが、14番のロングと16番を改修されました。評判はどうですか。」

大川 「いいですね」

五嶋 「14番はよく見えるように、けがをしないようにと改造されたと思うんですが。会長のゴルフ上達の極意、ムリ、ムラ、ムダをもう一度」

大川 「ゴルフの用語じゃなくて、私が若いとき、夜学に行っているとき経営学で聞いたこと。ゴルフに引用して、生活にも引用しているんです」

五嶋 「はい」

大川 「それをたくさん抱えた仕事がゴルフ場経営です。普通50組に対応できる用意をして待っているが、雨でも風でも（お客様は）来なくなる。熱くても寒くても。ムリ、ムラ、ムダが常につきまとう。私はそこで、社員にお客様へ感謝の気持ちを込めてサービスしなさいと言ってます。心から良く来て下さいました、と。私がせんならんことは、もういっぺん行きたいというコースに作り上げることです」

五嶋 「いいゴルフ場になっています」

飯田 「確かに、ゴルフ場の経営は難しい。100組来ても対応は出来ない。上限がある」

大川 「雨が降ったらあそこへ行きたいというようなゴルフ場にならないかと昼夜考えているんです（笑い）」

五嶋 「ハハハ」

飯田 「ハハハ」

飯田 「箱根の山の上に小佐野さん（賢治＝元国際興業社主）の持ってらっしゃるゴルフ場がありまして」

大川 「仙石ゴルフ場ね」

飯田 「僕らの前を小佐野さんが回ってて、キャディーを3人連れてそこの草を抜きなさいとか言いながら回ってるんですね。オーナーがそれくらい愛着を持っているゴルフ場は必ずいいゴルフ場になっていますね」

ショットを二度楽しむ

五嶋 「それは、大事なんでしょうね。ところで、飯田さんはプレーそのもので面白いお話は？」

飯田 「私は一切ばくちはやらないんです。」

五嶋 「ああ、そうですか。にぎりもチョコレートも」

飯田 「いや、それが、ゴルフだけはにぎるんです。軽いですよ。社会通念に反しないいでに。何でやるかという、2回楽しめる。自分の良いショット



と人の悪いショット（笑い）」

大川 「ハハハハ」

五嶋 「いやあ、飯田さんはユーモアセンスに富んでいらっしゃる。実は、メンバーズサロンというのを読んで、飯田さんのお人柄が出ているなど思いました。イギリスのチャールズ皇太子の長男がセントアンドリュース大学に入って、娘さんを留学させたらどうですかと書いてある。何のことかと思っていいたら、世紀の恋に発展するかも、と。なかなかうまいなど思いました」

飯田 「いや、現実には日本の女の子ようけ、行ってるんですよ」

五嶋 「そのために？」

飯田 「ええ、それで」

五嶋 「そりゃ、ニュースですな。うちのロンドン総局に電話入れなくては」

飯田 「どっかに小さく出てましたよ」

五嶋 「最後に飯田さんがゴルフで心がけていらっしゃるというものをメンバーの方にご披露していただければ」

飯田 「私は、サービスでキャディーがバンカーを直すべきではないと思うんです。プレーヤーが直すのが当たり前。特にセルフプレーの場合バンカーが荒れますね」

大川 「私はキャディーを教育するときに、必ずしっかりとご挨拶させるようにしています。キャディーの何々です。おはようございますという具合に。クラブからのお客様への御願としてはバンカーの砂、ディボット、ボールマーク、他人のはいいですが自分のだけは直して下さい。」

飯田 「杉原（輝男）さんが、プライベートでやるとき、いつも砂袋持って、私らが切ったターフでも砂入れてくれるんです。『あんたがやると、おちおちゴルフやってる気がせんから』というんですが（笑い）」

五嶋 「杉原さんはデサントの契約でしたね」

五嶋 「こんなに景気が悪いと大阪の地盤沈下がますますひどくなりそうですね。交際費が東京の100分の1だと言う話もある。どこの企業も本社を東京に移しているからなんですね。デサントは数少ない大阪で頑張っていたでいる会社。ぜひこれからも大成長を期待しております。今日はありがとうございました」



西暦1968年オーストラリアのロイヤル・メルボルンで行われた世界アマチュアゴルフ選手権競技の参加からスペインのラ・マンガ、ドミニカ共和国のカフィレス、ポルトガルのペニーナと世界の名門コースでプレーと見学をしているうちに何時の日からか自分が設計をして自分のゴルフ場を作りたい気持ちが芽生え、日本国内は無論の事、世界の名門コースでの見学プレーを試みて歩くようになった。代表的なコースとしてサンフランシスコのオリンピック、モンレーのペブルビーチ、スパイグラス・ヒル、ロサンゼルス¹のLAカントリー、マイアミのドラル、メキシコのクラブ・デ・ゴルフ・メヒコ、カナダのバンフ・スプリングス等々。

永年求め歩いたゴルフ場用地が確保出来、いよいよ本設計、建設になり総合監修の伊藤忠商事、ハウス設計の蔵建築設計事務所、コース造成の西武建設の各社担当者と当社専務と私の6名のチームがコース見学の旅行に出発した。まずは、英国のバーミンガム郊外にある古城「Shugborough」を見学した。当クラブハウスの原形である。次は、スコットランド最北端にあるロイヤル・ドーノック、この地は世界的名設計家であるドナルド・ロスの生まれ故郷である。このコースは僅かに人の手を加え造成を成した代表的なリンクスコースである。次に向かったのは世界最古のゴルフクラブR&Aの本拠地であるセント・アンドリュース オールド・コース、自然天然が造り上げた永遠の傑作である。次にロンドンからニューヨークを経由してノースカロライナ州のパインハーストへ。その当時既に18ホールズが7コースもあるというゴルフリゾートである。そのなかでもNO.2は全米コースランキングで常にトップテンに入る名コースで1999年に全米オープンが開催された。コース設計は先に紹介したドナルド・ロスである。彼はスコットランドからこの地に移り住みこのコースを一生涯を通じて手塩をかけて改造を重ね造り上げた。丘陵地に巧みに設計された人の手が加えられた形跡が見当らない程自然に仕上がったコースには安堵した雰囲気満ちており、幸福感を味わいながら楽しくプレーすることができた。次は皆様もよくご存知のペブルビーチ、私は今回で3度目である。山麓と海岸に広がるリンクスコースで、プレーヤーに強烈なプレッシャーとチャレンジ精神を煽りたて冷静な判断と正確なショットを要求する、厳しく、美しい絶景のコースである。最後は、ロサンゼルス¹のリビエラ、バンカーに特色のある内陸コースの設計と造成の見学を終え帰阪し、さっそく本設計に取りかかった。

以上の様な見学と勉強の結果自分なりに感じ得たことは、まず人手が加わっていない自然のセント・アンドリュース、僅かに手を加えられたロイヤル・ドーノック、ペブルビーチ、人工的に造り上げられたパインハースト、リビエラ、これらのコースに一貫していることは自然を大切に考え、分水嶺、防災を基本に置き、植物や樹木が良く成育する環境を整えて出来るだけ自然に同化し永久であるかの如く造成されていることである。次に戦略的又は、加罰的なレイアウトによって心理的に重圧が加わり歓喜と悲劇のドラマを生み出す舞台となる要素を持っていることである。

見学で学び得た名コースの必要条件を頭に置き、限られた面積と地形を最大限に生かすよう全力で取り組む覚悟でこのコースを設計、監修したが、今後もコースがより自然の姿に戻るように努力を重ねていき、そして自然に回帰したこのコースでプレーを楽しむのがさらなる「私の夢」であります。



Royal Dornoch No.16 Par 4



Pinehurst - 2 No.16 Par 5



Riviera No.16 Par 3